

國學院大學学術情報リポジトリ

編集後記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進センター メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2259

編集後記

茲に研究開発推進センター研究紀要第1号をお届けする。創刊号となる本号には、センターに所属する研究者各自の専門分野や、日頃関心を寄せている問題に対する調査・研究の成果9点を掲載した。

巻頭には阪本センター長の論文を掲載した。同論文は、氏が長年に亘って調査を続けている藤原貞幹に関する研究成果の一端である。従来の日本史研究上、貞幹による偽書としてほとんど顧みられることのなかった『南朝公卿補任』をとり上げ、その二系統の伝本の考証や近世国学者らの研究を通じて、近世史研究における同書の史料価値について再検討を加えている。

新井論文は、副題の通り、かつて発表した自身の論考に対し、後に知り得た知見を取り入れながら再検討を加えたもの。山王神道書『神道雑々集』と、同書下巻と同内容を持つ『山王神道秘要集』の25〜27条の比較を通じて独自記事をはじめとする両書間の異同を見出し、そこから記事の典拠、また両書の書写過程や関係性などについて述べている。

太田論文は南北朝期から室町時代初期の室町幕府成立期に、二十二社の内の京都を中心とした著名神社に出現した「將軍家御師職」について、その成立や展開、あるいは

は幕府や神社にとつての存在の意義などを解明したものである。

加瀬論文は、これまで焦点を当てられることのなかった「神祇官移」という文書形態に注目し、撰関期・院政期における神祇官と諸国神社との関係の解明を試みた意欲作である。このような文書論の視点から、今後分析対象の幅を広げていくことで、複雑な当時の神社の実態解明に向けた研究の進展が期待でき、本論文はその布石となるものといえよう。

中野論文は、本地垂迹説の影響下、天地開闢の際に顕現した神を根源神と位置付け、八百万の神々をその分霊・分身と位置付ける、中世の神道思想に確認される「一即多」の発想法を、果たして近世・近代の国学者が踏襲していたのか、否か、といった問題をめぐって、諸々の国学者の学説を通じて検証する。

中山論文は、教派神道教団のなかでも天理教、金光教、御嶽教のように、神道信仰を必ずしも本質とはしなかった教団における神道化とその組織的特色について、主に神道的な祭式の受容過程を通じて明らかにしようとしたものである。

藤田論文は、本センターの「慰霊と追悼研究会」における成果の一部である。近代の靖國神社に関する研究蓄積が意外に少ないことを指摘した上で、大正期の神社行政所管

の問題から制度的に考察するとともに、靖國神社宮司を務めた賀茂百樹の言説・思想にも注目し、その靖國神社観を検討している。

星野論文は、幕末期の国学者六人部是香が著した祭式次第書『私祭要集』に関するもの。「私祭」に関する研究自体が余りみられない中で、近現代に繋がる神社の諸祈願成立を促した原動力として、国学者の学問・思想が存在していたことを解明しようとしたものである。

森論文は、現代の地域社会の観光地化と神社の関係について、神奈川県藤沢市江の島の事例をとり上げ、とくに具体的な施設・景観の変遷における持続と変容の過程を考察し、その過程における地域住民の観光地形成に関わる活動の重要性を指摘している。

以上9点、いずれも、今後のより大きな発展が期待される意欲作となっている。

なお、センターにおける研究事業等についての報告は第2号以降に掲載していく予定である。現在はセンターのホームページ、<http://www2.kokugakuin.ac.jp/kaihatsu/>で公開しているので、そちらも合わせてご覧いただければ幸いである。

(太田)